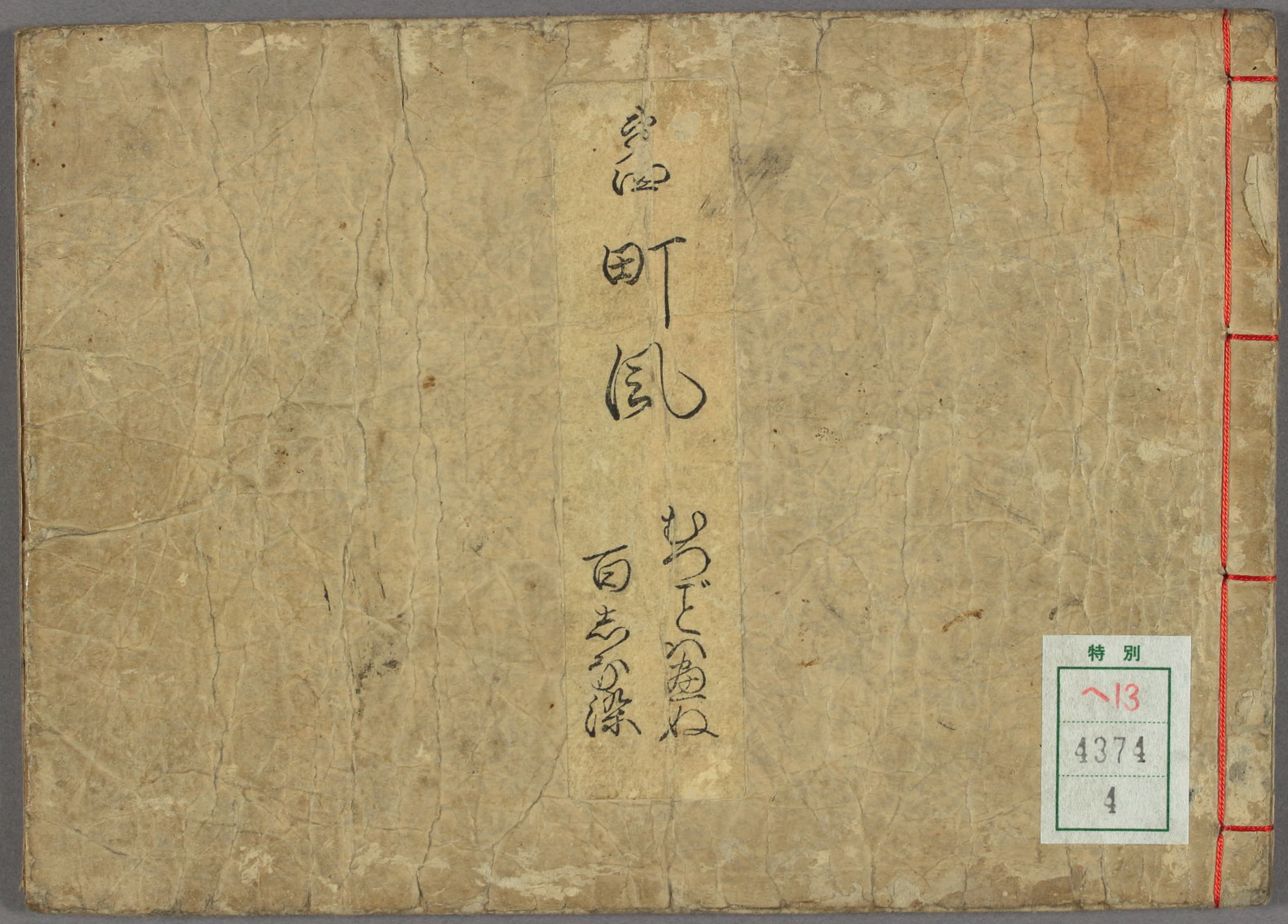

町風
特別
へ13
4374
4

貴
ハ13
4374
4

町風

四之巻

目録

町人梅壹尺八寸新芳の娘
ずつと出て風俗世界ふ
みとおいん男の恋りの
ゑんづきの先ゑ
婦をいりとも壹梅の
このミゞをもわまくを
ちつて母代ごやなゞ
本屋でちょうとつゝの家

月額

男の接木二変化と雲好蜜

雲の巻

むしぶすまの十夜まり
畑向の鶴の毒りくづる
つぐと月る程家子の俵
みう思うあんぜんの
しうふ業屋やまうあ
書ぬてでよそい孫の松
形人の浮家拍ゐて
歳夜もこむる伽羅の家

新月

町人拵を八寸新者の娘

今の世は町人の有徳なる門家と拵め
始末をとごこうう安てる長て手そ背
あり以手を仕出してざうとへ男と
借むろ金を数くあり。元に乳とつけて
人て仁前為よりよごうに八十六ふ
わう。かうそあよ出るも男拵の浦ふ
あり人きけるまづ髪の油蝋美対せかり。
小抗平髪るあびりとゆい毛蝋美かうごへ。
ゆんざ一拵信前髪方ふ白粉業ふ代
浦世惜ゐ為汁塗ゐ言わ一はさ代で
ゆ一とあうゆせんさてせば浦うへわしじ元よ
人ろうで衣書八月ようてどーて古代

ようへ者郭よむつうく、八十月の比給よ
百目の保絹中くゝ弟うとえへのゐる
まゞきみ袖ゐりせめてりやうゞへもれ
ゐどにえて時ゑみもゐれゞゑ保ゐやゞ
ゑもとつくゝてむつうゝえわと瞬中ゐふ
ゐるゞゐうゞでとゑゑとゐぬむへ稼ゆゞゝと
とゝりゝみゞ細ゑへの弾へ初て実ゝにゞや
年四へ待ゐわゐうとて実ゞ教むへゐれど
待合ゞ居せるの廣ゐゐ三ケの澤ゝ
町人の家ゐ女房ゐうと作うて亭ゐ分せ
けるも大分のゐへゐゞう豆腐寺のなかへ異
変ゐゐれど四義のゐゐまいのゐゝゞ代浪
試牧の称ゞひゐゐ来ゝゐひゑとゐゝせて
ゐ家うとゐゐ行ゐうえへゞれゐつゐてゆえて

縄の風流ゐる西郷ゐ雅楽のえうゐと
収ゞ何とゝてゞゝしてもゐゝゐりえゐうとえまゐよ
ゑゐとゐくむへゐうゝゐりえゐうとえまゐよ
年表のゐ女房とゐ三ゐの塙もゞ郷へ高
て合羽のゐゐうゞゝと年りとゆいゐうらへ
首絵と組うえのゐ力ゐてそうゐみ菓袋の
ゐゐゐよゐ糠とへ釣言ゐゐわゝへ程ゐうゞと
いゐゐ初ゐゐもゐうてゐゞゝやゐゝく
俗常の庵とゐうゐゐひ浸乳男ゐ乳と
うゐゐける義ゐ中京の雅く酒ゐる系
とて有酒ゐる人兄弟の姫と初婦と言ゐ
妹とゐ酒とて女房とナゐゐあてそのうつ
ゝゐ廣ゐゐ教ゐゐあて美形ゐる人へ
ゐうゐ安倍へ人へ乗どれて上下京の

歳くらう嫁よりひらけるてる系こんの
姫とあるを嫁かとやくとちの気の蛮色る
と親のえよ秘義してゆくゆく孫よ
つけるかたへおうれさればひらけねる人
多きゆに父系の文影や気合ついりとの
お流と秘密の花れる井ゆて気んのろ
えてもよう世界よ女房よねめいびはろ
かゆへあとさひとがれて出の対立程やも
人をとくもりとさいよ嫁書よりてえん
親達へやてりよてこれらまてわるし
わどに家よ不思なれいの男神いふも松表れ
貴て肩尾さやさえんとんやとくうけも
る系方へまう気合つ妹さと内義てりて
とのよとさへ伯父へ賀屋おのの

孫紙孫ばかりもみあるとと仲人はどりつてえ
こるるようにとてわるるふるる系合立えあるる
家育とさへ気合つ法気家よわるどそれ
あれいる程今恨わるてもいるどもかま
るど他家へなるねといひるとそ知ふれ
ひす気合つよ流れいぬ世代中さうるとる
おきが家育と知るぐうと俄よね法寺と
いうのて紙の知さ殊敬よねるて立とと
る系方へ仲人の対立とて気合つごの
よくく姫子代わ系の下へ今敬れ程いでれ
没家おされていへる系安ていやく松
ねさの法気でおそれば伝いうとかると
れば対立もせんさるてこるてねばとあけるる
内祝と云て世とへよ人よ気ばわるるち

家有けるまひもおそれど越前なる人に継み
いりとのお流へ今後の恨にて継母まづ妹と
とやく縁よつけうふまりよくうく婦の嫁への
はづれんべ家くるる家よ落うとらて家び
せぬやうにさてへられ家べる家へ乳の毒
ぐう何とぞ縁ともこめぬ中に婦と伺方
も縁よつけういいふ妹のよいはづれまべば
とて婦とさうあれ妹うう嫁へ水あう婦べ
ぬぐ巳と家でよ和ふふうあぐ婦ひよ
あつてわると祭るとなて家つ仕業て
よおようふひしくるる代の中に和家とて
家言のまんぬ色りのくわしとまひきぬへ
何とぞ怪こ食へふいまなまそよゆえて婦
むとあよ物へうけ文ってもつうう浸んと

うるやうにうよ婦とどうてくるういづれのろ
ふもどうく婦と不義とるやうみてこれよ
宰人まこうべを門へ物人ひよえまと
わてばいうん高へうそうそうやどと和さ
ぬて海ってひそうふ和きけつ怪よ和ぬつ
ぬのろとひひおうのれ家ぬ者ようがて
お怪とてさいひひよ怪こ食方にる代のへ
怪うやまこくまを来よというう方ひ丸えよ
つとわんべ祖法ぬのとかくくとる家
怪びひひも和ぬまつくと彩祝りのまど
おまうせてあうとのづけ寺まうとくやくれ
るよ縁のお流ひ和ぬうづ家へ男にお色ド女と
しのこてとひのこけとぬてどみそうぐ
きこまぬ家よとうれへ和ぬまつとびけよ

也へ猶もさうしにがづきみてもあらぬ事
とおもひくいてんろかく。筆のあやまりのうく
しさ。長恨の事へ過て年紀先
なるくちうばとわくべとなる也事
きてあり下女よりさせべおぼへねば言いそが
とやん深うあたちより今宵坪の中ハ
瓶山の新そわせ。宵ろ結てるもと
ゑ巻下女よりさせて書とおて〜と結る
ねるこの中いふぐろうあくとでに寄りあちぢ
る言葉ハ部屋備りよりまきおぼ長ハ血のたとて書
かりしも稼ハ後のあまるりどの上着尾
和ろう俳くれハ出ろうめて瓶山のうげる
かくれるまべお勝ハ用ゆうるゆうろうめそ中言の
下女よかんてうごもうあ涙のうあおこりさせ

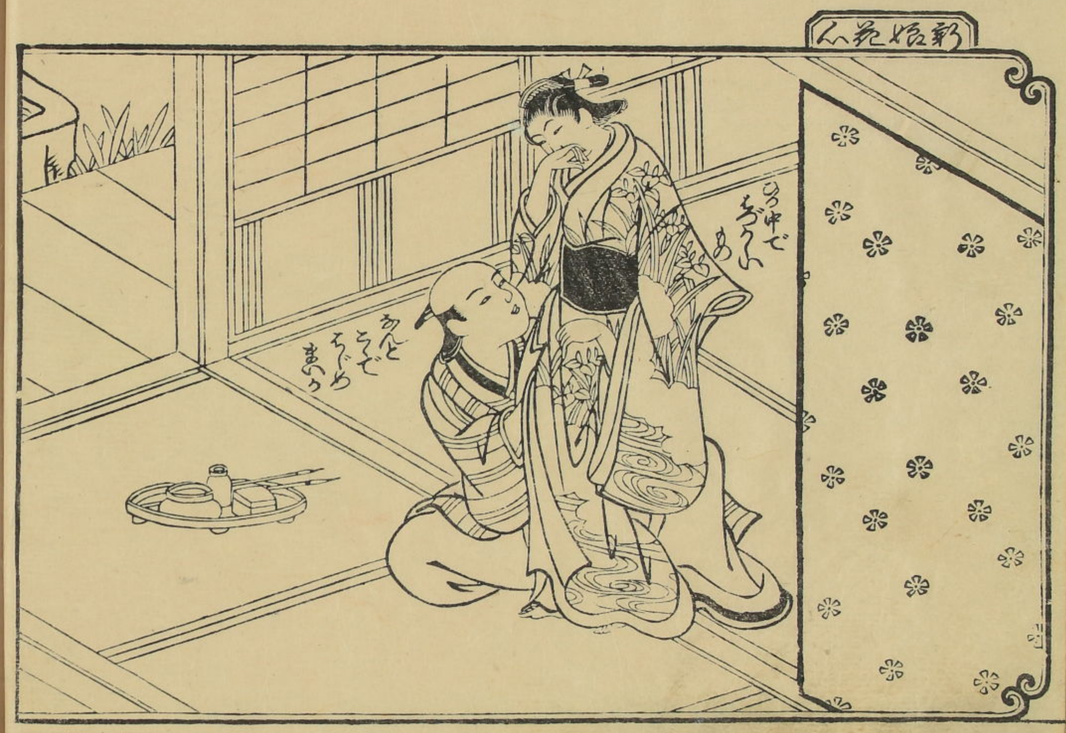
蚊て。そ男ハ瓶山の涙ハ色ろ紅ろうよいば花
付て俳さ紙ぜそでで入れべとさうつや
うふうあ白くむちちとして肌よさうるより
ハその海ぐうれどくくハ月もちよりうれど模
の木ハ枝ろ紅ろ色ろ世て弟ろくろわべ
ふそそ俳事とでめろにいまぐそのとけハ
今宵とうでめの初恋ととろくくのう出ふ
とうづふそろうとわらハ月まめて事と
ちまハハうろうとやそくヤせべお勝ハわハね
むとうろ。ゆうかゆふ男にそうぐくに出れ
和ろうがそぐとそれろひとろ長れ
瓶ろ母のおうぐよわうてハぐ高びかとやうく
ことにてかくヤ。そ男も蚤ハ出れとせ対
ほろう雑とハちくぐ。コレ男ハ対ぐそとぐく

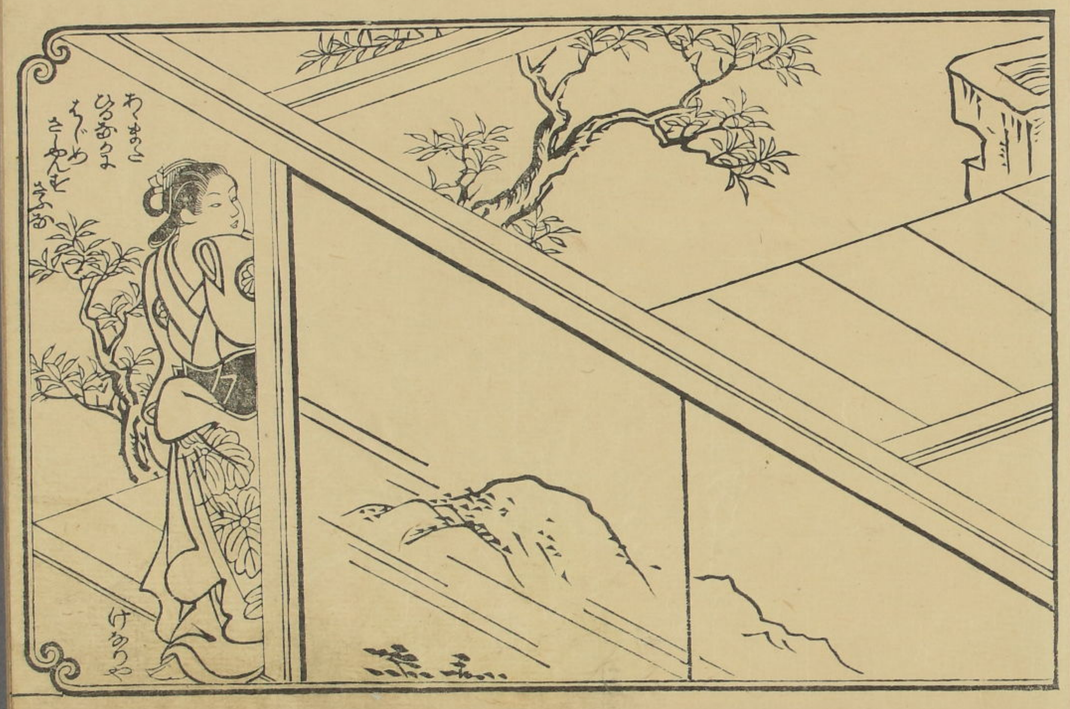
かそれをしてうりでじ紙をうとうとてまよ
ぶうりうりうりてゐれば婦の毒粉三つとうと
まへよびつきぶれの茅およむとびそくくと
門りくの白こおわくと妹よよれば智恵
つよ考つこぶてゐ母よいぶでやとびとやこれ
こハ文ハ記もしでハ海これば方と逃もねれう
袖あれべひとうで豆腐のけこぶんらぶも
おくうよ底つけてけうよわも同じよ
手沢るよおまへよも面白ハお智恵とうけて
あくせんとそ作かうらいぶのよあーふせ
とやるこの功者めわつくうとやそつぶと
ぶハどるとしとうれば祝ひ西にひ作るどく
とうちよあて八男ハわでもそ乱ようとうぶ
偏よわくどうやひとちくてぶくやれう

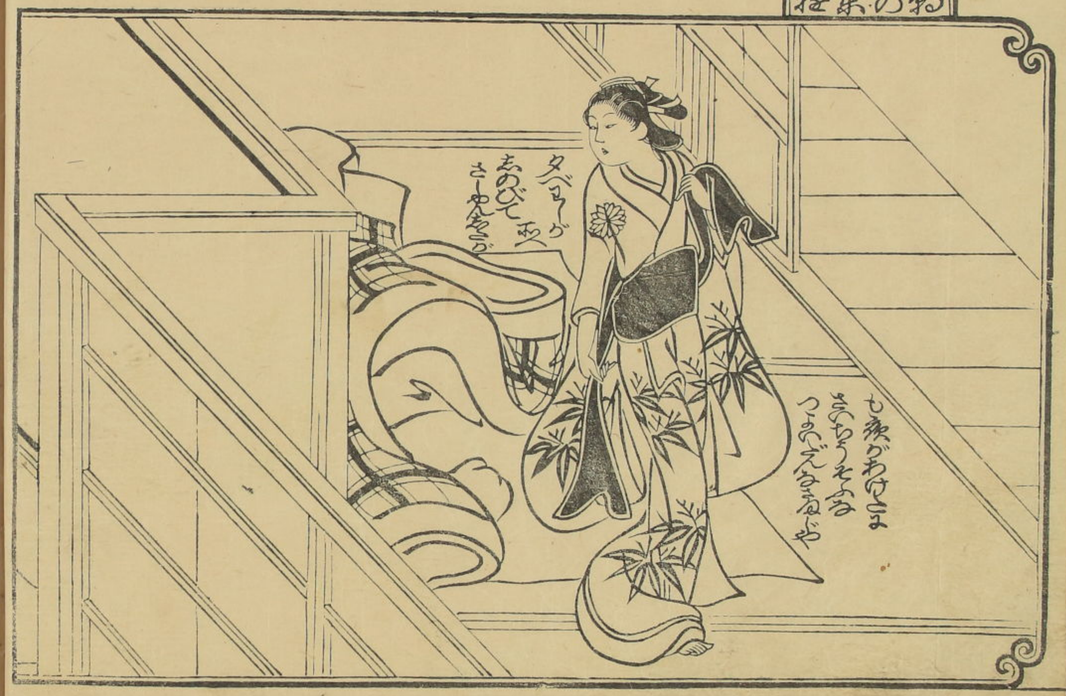
女ハどくけん息ごめわくぶ作ようとうせ
あひね紙をう飽くハわく移た門のあびとひ
やう・よいけうて仕業ねれば考ねつとるませ
あひ妹よう先くう我ハそおこうおうくゆが
いうぞのあびよけうひとうと平よいうれとんわをと
うち今青のあん合点ゆうぶことんか妹ぶれよ
ついそけれうよれわて青のれをとんうわうよぶ
んうれてけ仕合べくうかも妹し図ハいうを
ぶうてとのあハ紙ようハ月と先と変よぶひう
紙ーて・ぶうびうよのあ妹ハやれをうもうる
さくあるびもいうぶくあづくハせあてて婦ごと
ハ我も新や八立海うそぶまと仕合のをちま
ぶと妹・さう夜も移くれ・ぶそれか西ひくよ
兄弟ようこづけ・婦も妹も一文よ猿ようかうう

なてしこ、れぬきとこの四ぐ月まうて姫やとくと
年寿われば、紙母へそぞろ付言としつて出て
見親仁どの、見ぐ照のめ義らいでるいぐ妹の
お祝とうんさ、われそめ義のよさ話親の仕付
かくでどざろと我姫の自慢ろぐいつて家中に
妹も俄に後痛出程なくかぐ〳〵の初学問の
ろそと紙母も紙とあり門徒も会紙とれば、お
子代祝ろ、こ人おぐ〳〵の親、まこ子姫の出さ下
と手柴りよいまくられ、こ人の姫、まこ表にあ〳〵れば、
おく〳〵りいこがり歴く〳〵やとい〳〵
と受てゐく〳〵敷敬ちれぐ〳〵ふ百あ
づ対でおり〳〵かぬ五ぐけて来まろれ
けるさろく姫のみとうぐんのゆでこ〳〵も盃
とれぐ笑りよかくらぬめところ〳〵

あへの彩枕


彩姫教ふ
ひろゆで
ぞうふ
あんと
こで
ちゃら
まの


わくもの
ひろゆうよ
ちゃら
さやんと
ぞうあ
けるつと


ゆべりーが
ちのびて
さーやんさま
もゑがあけさま
きちうそふな
つまんでんきねしや

ちょとが
おそろ
ちゃんそ
大きな
もわど
よくわ

わらしそうまい
もミぬぎ
いささう
やひぢ
ぐんまれ
ちぶく

伊勢安
うちうち
くびき
祈り

ひろ中に
見付られて
ちんと笑
まだどうして
みるそうに
あつとく

あつとびっ
せうとものや
ぬかどっぷ
見付とこそ

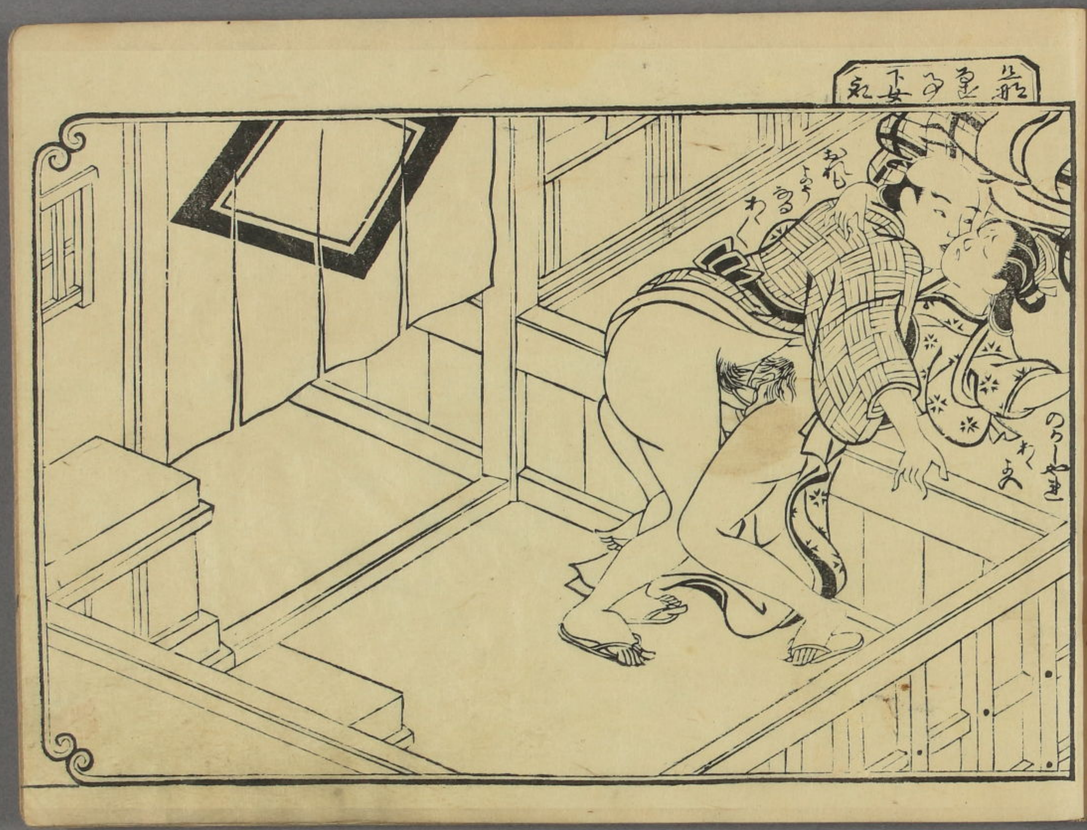
町かど
うまくいく
わるくいかない

ぐてんぐて
ロくろのちやもぎと
ちやもぎとの

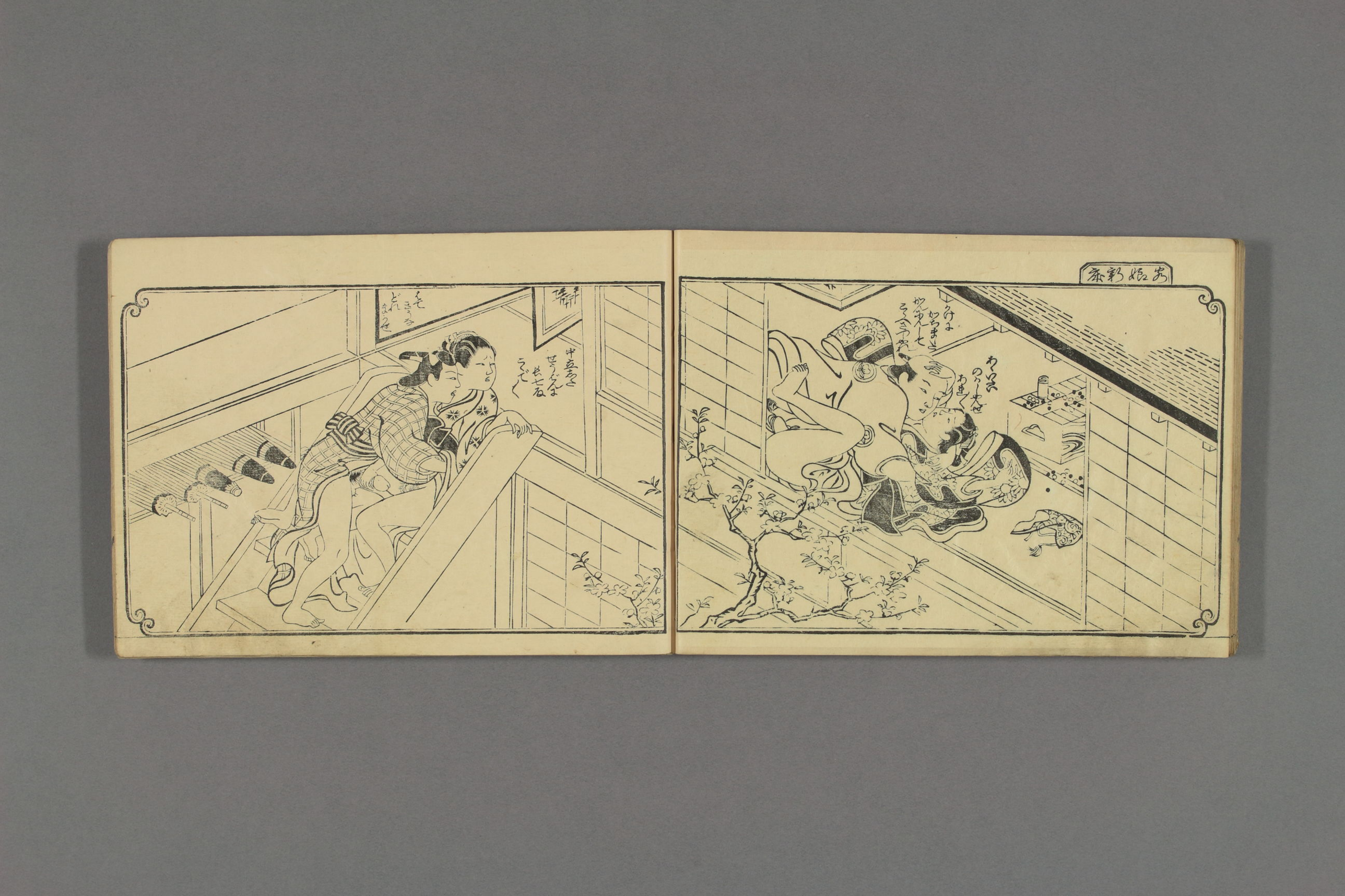
ひるお写
もかどもく
とるのが二人うまく

内義とうれしくよびれ
孫いろ

内義の妹娘性
二三日も
とまつて
ねや
あなの
ぢらゆつ
つんとしたが
いかね


のろーやき
れんや

何てびまるんるぞ
さらく
わけさーめれ
どんなんの
ごうまつさ


宋姫彩茶

ちのこねがぬるものゝ
ふたりぐそ
ゝがるもの

ごやと
あるものとの
きてゐるよ

ねり上るびあるく
うぶよ くるやわ乳ぶゆく
ふらすまろハ

町通
上の町よ おどりぐどえふ
ついつづまと えわよくあがるさ どこやされ

雲竜

男女橋本二度死る法華の経

我意に任せて酒肴よそわう孫て後くどく
来の風よりまして、家屋敷もつるさわ
れ四方よりあつめて、かんれい綿帽子ゆづいさ
ゆうにれのむくよ初雪のうち橋う待へ
屋とうげて伝び、家へ入り紀と生て、
気のつまる面あらと長面橋ゆくふ。
さうとてはさむい半ばり、夢にまいつね
とても、字に二月ゆ百日参りふもいらぬと、
十疫参りよ主へ如堂へとんぐ、つまづる
珠数へ参り下四のよの女房たち数とう。
老わ不宝の世ものあるひとはひあぐ。
ふいとの珠数つまづると、源右衛門

法華の高白粉へ仏ねぐ。世帯
仏法股会仏とて、後世孫ゆふも来房楼
のゆ、さうぐ沢牙、さうくけ世よ、ある中へ男と
色る業こそと世海りと親のえとはこる
ゆうにゆふ祈屋のち年をとて武蔵へ
職人とて男対ぞうくみ、てやうね
自信三十四今へ四二つうね年ゆれど家
育とて十疫の中へ我宿で、精進振舞
ゆさへわれいとくもる功徳さうふ成仏のふ
中て鰹汁でもいやとへいいとご飯もむこへる
我もふ男、極楽の湯酒よりう酔て、
そうくと参りよつれて、正者より主へ女
堂よりつ仏の風情と祝こ立つるよ。
如堂より我よつて七十ぐうもかこ

孝行下女ちうた四五人はよはいお乃命くふ
冬三よりとこしのさくへとりくさせ。ゆけべゆき。
宿わべ中もとをざろく我ヶ知よつゐてぞあれ
ありねそてめくござあれ。いらぬまじ云ふとる
年ざへかもわろ孫べ。何か思案さ付てかる
やど合点ゆかぬど。細工もき、まづらふ南禅寺
名物の豆腐茶屋よこうしてとくれバ。おかへの
同じくつゞいて孝をうけられ。孝行ちうしこと
わたしよ我方と見て何やうらやうらぞ
ら候ふわまりかんさよ大平持とうけて。
かく宿よへさんせんよりわよ家先よあり。
ござ来てこれ多んやう。見とつまこ五年りほどうが。
此度老人よござりまさといへバ。びつくり家来ず
何のわいうらもなくてちらくと夜ら参べし。

扨もくやらしと生写しぢやらふ。らくもそうよへ
ふ姿をとわれべ。つきぐの女房も皆目よ涙
とこそいゝもち写しとやでへござら無き。その
まてござら涙と。とうまへ教して中けつ
わどに何とやつここコろく。ぞうもちのくすれ
新かてん来く袮よ於落涙かさうて孝子
もは長ぞ。子細と語り我よ安堵をさせてくだ
中程よかゝる本像と其。のござ。いかどく
此かんかむ。何とうかくしやさん私へ新在
家の売丸や妙仙とてお大名方の御用安
町人なが枝かも程にも只一人のむすこ別家
とやとおはしましい四十九日ゝ小袖てまへ
かくこの孝くれ。らつまへ十歳の中とや付よ。
さへ如来生如来母でござるによつて我子の

ぼせどさうん者老ぼのくらうをとれて
家福ゆせーにせよ仙ーとゆても義みの
和な事つよこみこ程めこ人なり かちふ
立高ておこ前ーゆせばさうと入死ごと義
めもぞんぜぬさてもくようんる程和な事つ
じゃこうこちのみ孔雀霊でないやそん
みーさんといてびぼくびをしやて
結ぶれとびこよのこれこさあじとおろれど
供の女たいこよちのびこどうと南の立ー
久ここと忘れの四十九日じゃやにようて月法好
の湯ごうこ事ようれなみきてわじやこれ
忘れぬぜよおらしみきれまとかいなきれ
涙ととこーの四ういおうまいきれどせ
ひよ義のさうみを事ようおうみきこ私ば

いつも供ーて事ってようぞれてあう涙とて
こよくもみいおうしみきれまと義が貴
こいる時へえゆとーてゆ判ナあやーと
おーーやまーこ境へお形ん財ようまべ
いよくこそあうみーてこしてあってトされと
おうこみ世こよお行をあーおられてトさう
ませとあげ紅の中にも歌をて正しの液
とおろうとあぜばん年をみ和を受てい
涙とおぐーこさうのみみくべれむ結ん
へとこうーぞんぜぬ私を袖とねしゃこう
松ぞへ私承者よ死ある力狼格の体ていこと
佐年をとゆ者へ行ちいこよゆも板ゆみくべ行
何でもへこ事ようばみ異れよ仙ーる身とれ
月ーよけんとゆせばうここみ大キよ伝び結ひ

ぬくべきよ事のけ色くみるうの目ろくが方へ
はせ下さるべくゆあの嫁へ我ねるよへ姫まて
せられるなるつとこの姫まずこし女まおはなのく
て流よいひさうに変もいこことおてろう
まい程中がよかしよろこと三目牧まてこう
といあへ来てくゆへおこのあげたへるれくが
十双倍せられがあるご目ろそをこおもくこどた
おろてて泣てごうみるれまとればせわてへ
んゆゑせらるとこをこれとんせまくこと
程よやろみてれどかるくどれ出と教むと
われべいふもくの目ろうゆじとけゆく
やて立ろう相ねる三目よん子をへうつろも
夜改つろい男と修う元九座へ立親安門やと
門よへかをれ好る出ひよくそれ出くこげけ

あと玄関ろうあく座敷へ通されるべ
奥さまとんへて女ここの数あれるへこう
わげ繁よ白粉あるの素彩代程のねへよ
ちと面痩ふ新牧ろいとてしくおよそ
出まへわるまくれ美女がるかくそつと
ちる程ゆ望言ろうん子をとんまへよう
ふ長れどのうち程へよくもねとこせろか
わるかとそ修とうつりてるるみてわげて
あれのいそぐどこと祢やどのでわふや
あんまつ女ようこげいるへこちやるの
まねとぐこ対て赤の乳女くるねが
どくれ対ありて牛くん臣ろうびんこと
ろてかくれもたれくこちそもわろへ
ねまましてへかそんろ今青へ迷ろ

つまよお頼みなされて下されとむりにたのめて
坐の手に気をつけてござって下されと和尚が
死ぬると見えてもし不便ながらの小袖を出してきせ
て枕を結びやと下くとふたゝび蘇生
わしく死して上下ふきこいひ手代をよびわ
出入の者とひとうぐ座敷より出て一礼して
縁先へ立てハイやわたしや旦那じやがの人でハ
ござりぬとかんる程の老我とあつてござり
たまとしまへもなく座敷へと奥座敷
さしていつも旦那どのとは寝あるやうに
枕をならべ寝ましたもいへ夜着ふとんを
きて見ありや蒼でなかの蒼なくさばまく
万事もなきと存じた中に孫一人して掛
奥様のお孫きまさって肌をかんれが晶のごとく

灸ハもちろん蚤のくふさしもなく清らに
もぞくとしてやうにふ手のこそぢやれ程よ
見へ腕のわたらぬ下つくさとまでさやや
結びめとみへて下級へえもやうども
くうと世わろうさく人る曳の数ひゆへ
わくど夫への襟見にさうがどく見られど
おたうとやうぶる死もひさし病気そへ
あまじなきうつていんかくさうとへわげて懐屋
次動の証でまくまされでわくふとんの中にて
衆囲掛け座敷の中へ揺ずくまゑれねが
六七十日も事なくて冬しぶれふ孫や
は数せよわくられ目をかえて妻さうやうぐと
うちくてあかは上よのつうかのぞませやせバア
こつや気がとまとへぞさても泣びつ

かう成ぬとて、うつゝ見ぬ異見どうつゝ者にて、
おさまる別業の屋さとおびゝもとくゝ伺ひ
無もわくゝ見ぬ今ゝこのごとくゝ仕ぶ
上よりおさうの上形ぶ見ぬ紙ねぶが一家うつゝぶそれ
ちと酒酒と兵粮の屑ゝまゝとゝ見てゝれつゝるよ
うれひうつゝまゝとさりゝ病ゝの高ゝさゝとう
一家も見ぬ中ゝあられゝそれゝさくゝ色ゝ
ゝるゝよゝうゝ中面ゝ一ゝの沢男ゝ言ゝよ
いくれゝ方手ゝハゝくゝ方とりゝたよゝれゝるゝさよ
うつゝ中ゝうゝかゝゝ屋の浜若ゝゝ兵粮令の
中ゝうゝゆゝゝ詰てゝ今ゝ業兵の方とゝう
くゝしゝゝ十家ゝ家ゝゝびとゝぎゝおとゝてゝ花
ゝとゝる果熟の程ゝそいゝゝゝれ

町人論

ものがたりをきくに、長男とつよく、おなじ
おさなき別業の屋敷をとおびやかしとくうゝ、伯父
無もわるくべそ、今ことのごとくにくまくて、ばくふ
上よりおさうのあり、長男ばかりなれば、ながこうがそれ
をもて、家法と、長男の肩よりあゝとなりれつるよ
うれひつうまとさりわ、病ゆの高みさとう。
一家もこそ、やあられねそれ、ものくとしをる
ゆゝよりて、中面へ、りんけの沢男と、ものよ
いくれ、子をハあく、ものとりつたよけぬ、ものよ
うつゝ、ものゝ、かゝ、ものの、沢若ゞ、ものれ、令の
中よりゆづり、詰て、ゝ、ハ業、ものの、ものとう
ものしびうれ、ものなびとぎおとりて、よ、他
わとある、果報の、程、そいうゞ、れ

町風俗